

神山町の淡水魚

淡水魚班（徳島淡水魚研究会）

中野 晴夫¹⁾・大川 健次²⁾・細川 昭雄³⁾
 太田 茂行⁴⁾・田中 義信⁵⁾・金森徳次郎⁶⁾
 吉田 光昭⁷⁾

1. はじめに

今回、吉野川本流の支流である鮎喰川^{あくい}のうち神山町の区域に生息する魚種を調査した。鮎喰川とその支流の^{おおなこだに}大中尾谷川、^{えだだに}江田谷川、^{そうちだに}左右内谷川、^{おろのだに}鬼籠野谷川について、調査地点を20カ所設定し（表1・図1）、1999年8月9日から8月29日にかけて調査を行った。ほとんどの調査地で潜水調査を行い、肉眼で生息する魚種を確認し、水中ノートに記録した。また、投網やたも網で採集を行ったが、投網の使用は神山町漁業組合の許可を得て行った。

表1 調査場所

調査地点	調査場所
①	広野 高瀬
②	阿野 広野
③	阿野 橘谷
④	阿野 福原
⑤	阿野 屋那瀬
⑥	神領 大埜地
⑦	下分 栗生野
⑧	下分 今井
⑨	下分 北宇井
⑩	上分 川又
⑪	上分 川又
⑫	上分 江島
⑬	上分 殿宮
⑭	上分 中津
⑮	上分 金泉
⑯	上分 江田
⑰	鬼籠野 喜来
⑱	鬼籠野 中津川
⑳	下分 黒口



図1 調査地点と調査水系（①～⑳は調査地点）

- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1) 徳島県立名西高等学校 | 2) 徳島市出来島本町3-20 | 3) 徳島県立川島高等学校 |
| 4) 東亜合成化学工業株式会社 | 5) 四国化成工業株式会社 | 6) 徳島県立阿波農業高等学校 |
| 7) 徳島県立城東高等学校 | | |

また聞き取り調査は、佐古亘弘氏（50歳）と門田守雄氏（50歳）から行った。

2. 調査の結果

今回の調査で21種の生息を確認できたが（表2）、鮎喰川に生息する淡水魚は自然生息のものが多い。

表2 鮎喰川で採集・確認した魚種

魚種	調査地点	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	
アマゴ(サツキマス)		○											○	○	○						○
アユ		○	○			○		○				○									
ニゴイ		○																			
カマツカ		○			○			○													
ウグイ		○	○					○	○	○	○	○	○		○	○					
オイカワ		○	○	○	○	○	○	○				○	○			○					
カワムツ(B型)		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○		○
コイ		○																			
ギンブナ		○	○																		
スゴモロコ		○																			
シマドジョウ		○		○	○	○	○	○		○					○	○		○			○
スジシマドジョウ															○						
ナガレホトケドジョウ																					○
ナマズ		○																			
ギギ				○				○													
アカザ		○	○							○											
ウナギ																					○
オオヨシノボリ				○					○						○	○					○
カワヨシノボリ		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヌマチチブ																					
ドンコ																					○

○印は生息を示す。

1) 調査地点ごとの結果

調査地点①（図2）は、堰がコンクリートでつくられており、堰の付近では、上から下への水の流れが激しく、多くの魚が集まっており、個体数が最も多い場所である。体長10cm程のオイカワが数百匹集まり、群れをつくっている。潜水して観察したところ、大きな魚もいる。アユは体長30cmのものが4、5匹群れになって泳いでおり、体長30cmのサツキマスも、個体数は少ないが生息している。水の流れの静かな砂泥質の川底の場所では、シマドジョウが、10個体程の群れで生息してい



図2 調査地点①

る。またカマツカは、体長20cmのものが砂泥の中に身をひそめていて、体長10cmのものも個体数は少ないが生息している。ヌマチチブやスゴモロコは瀬になる場所に見られる。ヌマチチブは小さな岩の下にいるのも潜水調査で確認した。体長2cmほどのヨシノボリの幼魚が群れをなし遡上^{そじょう}してくるのが見られた。ニゴイも体長30cmのものが少しいる。ウグイも体長25cmのものが3、4個体群れで泳いでいるのが観察できた。この地点での投網、たも網で採集した結果を表3に示す。

調査地点②では、水の量が多く、流れが速いので、魚はほとんどいない。大きな岩のまわりが少し浸食により掘れていて、流れがゆるやかになっている場所では、カワムツB型、オイカワ、カワヨシノボリがいるが、個体数は少ない。

調査地点③（図3）では、水深30cmの浅い瀬になっていて、水流が非常に速く、投網を投げても流されてしまってもうまくいかないので、たも網も使用して採集した。岸の付近が淵^{ふち}となっていて、大きな枯木が流れ着いており、魚の結構な住み場所になっている。岸の付近は流れがゆるやかで、魚が落ちつく場所にもなっている。潜水して水中を観察したところ、岩があり淵になっている場所では、体長25cmのギギが4、5個体群れをなしているが、夜行性なので光のあたらない岩のくぼみや下にいる。体長12cmのオオヨシノボリも個体数は少ないがいる。体長7cmのカワヨシノボリは砂泥質の川底に、4、5匹が群れている。流れの速い中央部では、オイカワが群れをなして泳いでいる。体長の大きい10~12cmのものは、遊泳力があるので、水流の速い場所で生息できるが、ふ化後まもない体長2~3cmの幼魚は、川岸付近の水流の少ない場所で群れになって生息している。カワムツB型は、岸辺のツルヨシや水草が茂る場所にいる。投網とたも網を使用して採集した結果を表4に示す。

調査地点④（図4）では、水量が多く水の流れがゆるやかである。しかし魚の個体数は少なく、オイカワとカワムツが一緒になって泳いでいる。カマツカは砂質の底に体長5cmほどの個体が少しいるが、大きいものでは、20cmのものが1個

表3 調査地点①での採集結果

魚種	平均体長	採集個体数
スゴモロコ	9.6cm	2
アユ	22.0	3
カワムツ(B型)	11.0	5
シマドジョウ	11.1	3
オイカワ	7.0	17
ギンブナ	5.8	3
アカザ	8.5	1
カマツカ	3.3	4
ナマズ	18.0	2
カワヨシノボリ	7.3	3
ウグイ	14.5	2



図3 調査地点③

表4 調査地点③での採集結果

魚種	平均体長	採集個体数
カワムツ(B型)	10.4cm	8
オイカワ	14.5	12
オオヨシノボリ	10.6	2
シマドジョウ	11.3	3
ウグイ	5.3	1
カワヨシノボリ	5.6	5
アカザ	7.0	1
アユ	25.2	1
ギンブナ	22.0	3

体いた。魚種も少ない。

調査地点⑤は、谷のようになっていて、水深1mほどの淵ができています。魚種は少なく、オイカワとカワヨシノボリとシマドジョウが生息していた。個体数も少ない。淵ではオイカワが10個体ほどの群れで生息していた。

調査地点⑥(図5)では、水深1mの淵があり、カワムツが4、5個体ほどいた。瀬の付近の流れのある所ではオイカワがいる。少し下流には堰があり、流れがある。この付近には、体長25cmのアユが1個体いた。シマドジョウの体長7~15cmのものが、多い。少し深みがあり、流れのない場所の砂礫底の場所にシマドジョウはおり、両種は^{れき}住みわけている。



図4 調査地点④



図5 調査地点⑥

調査地点⑦(図6)では転石があり、その間に体長10~15cmのカワムツがいる。体長3cmの幼魚は岸付近の水流のない場所で、40~50個体の群れで生息していた。オイカワは体長15cmの大きな雄も2、3個体いた。転石の間の礫底に体長13cmほどの大きなシマドジョウが多くいて、30cm四方内に2、3個体の割合で生息していた。転石の下が深く浸食されていてくぼみになっており、体長30cmのウグ



図6 調査地点⑦

イが5、6個体群れになって生息していた。カマツカは体長20cmほどの大きなものが水草の間にいた。ギギは、転石の下部の光のあたらない場所に体長20cmのものが4、5個体いた。砂礫底の場所には、大きさ5~7cmのカワヨシノボリが多く、30cm四方の枠内に5個体の割合で生息していた。

調査地点⑧(図7)では、岸に水深2mの深い淵があり、体長20cmのウグイが4、5個体で群れをなしていた。浅い場所では、体長5~10cmのカワムツが20~30個体の群れで生息し

ていた。少し下流に小さな堰があり、水流が上から下へ落ちる場所では流れが速い。そこには、体長25cmのアユが4、5個体群れになっていた。これは放流されたアユのうち、釣り残されているアユと思われる。砂礫底の場所には体長4～5cmのカワヨシノボリが多く生息していた。体長13cmのオオヨシノボリもいるが、2、3個体であり、個体数は少ない。



図7 調査地点⑧

調査地点⑨（図8）は、水深10cmの場所で、50cm四方の鉄板が沈んでおり、その鉄板をそっと持ち上げると、体長12cmのアカザがいた。付近の平らな石をのけると、下からアカザが1個体出てきた。アカザは、平らな物の下に隠れる習性がある。川岸の水草の根付近にカワムツが身をよせている。体長15～20cmのウグイが深い場所に4、5個体の群れになっていて、個体数は多い。礫の場所にはカワヨシノボリがおり、砂礫底の場所に体長5～13cmのシマドジョウがいた。おたがいに住む場所を分けて競争関係をさけている。



図8 調査地点⑨

調査地点⑩では転石が多く、水流が速い。瀬と水深1mの淵とが多く、ウグイが多くて体長20～30cmのものが20個体ほどで群れをなしている。カワムツの幼魚で、体長3cmのものが流れの少ない場所で泳いでいる。体長5cmのカワヨシノボリもいるが個体数は少ない。

調査地点⑪（図9）では転石が多く、瀬と淵が交互にある。ウグイが多く、体長35～25cmのものが50個体ほどの群れをなして泳いでいる。ウグイは食べないので捕獲されることが少ないため、よく成長し、個体数が多くなっている。アユは体長30cmの大きなものが10個体ほど確認された。聞き取り調査では、漁業組合がアユを放流したところ、友釣りやどぶ釣りの区域であるのに、まだ釣り残されているものが成長しているとのことであった。カワムツの体長3cmのものが、流れのゆるやかな場所で100個体程の群れをなして泳いで



図9 調査地点⑪

いたが、体長10cmの大きなものは個体数が少ない。オイカワは個体数が少なく、体長12cmのものを1個体確認しただけであった。カワヨシノボリは体長7cmのものがいるが、個体数は少ない。

調査地点⑫では瀬と淵が交互にあり、大きな岩もある。水の透明度はきわめてよい。川底は砂礫である。生息していた魚のうちアマゴが特徴的で、体長15cmのものが4個体群れをなして泳いでいたが、個体数は少ない。しかし、体長3cmの幼魚は多数群れをなしていた。オイカワは体長5cmのものが生息していたが、個体数は少ない。カワヨシノボリが砂礫底の場所に多く生息していた。ナガレヒキガエルが川底に1個体生息していた。

調査地点⑬には、小さな堰があり、水流が上から下へ流れ落ちる場所がある。ここではアマゴの体長12cmのものが1個体生息していた。カワヨシノボリの体長12~13cmのものが多く、30cm四方の枠の中に5個体いた。

調査地点⑭は、大中尾谷川である。大きな転石があり、川底は砂礫である。水の透明度は良く、水流が速い。カワムツの体長10cmのものが3個体生息しており、体長3cmの幼魚も40~50個体の群れをなして泳いでいた。カワヨシノボリは体長7cmのものが、藻類のついた転石の場所に生息していた。また、体長の大きいオオヨシノボリが1個体いた。スジシマドジョウの体長10cmのものも、1個体いた。聞き取りではアマゴも生息しているという。シマドジョウも、数は少ないが生息していた。

調査地点⑮（図10）では、^{かねいずみ}金泉中央橋の下付近を調査した。大きな転石があり、流れが速い。川底は砂礫になっていて、岸边にはツルヨシが生えている。ウグイは体長15cmのものが4個体いた。カワムツは体長13~15cmのものが8個体群れになり、岩のくぼみにいた。体長3cmのカワムツの幼魚は多くいた。シマドジョウは体長20cmの大型のものがいるが、個体数は少ない。カワヨシノボリは、体長7cmのものが多く生息していた。体長13cmのオオヨシノボリが少しいた。オイカワは体長12cmのものがいたが、個体数は少ない。



図10 調査地点⑮

調査地点⑯では、江田谷川の橋付近で調査をした。川幅3mの細流で、大きな岩がゴロゴロしており、瀬と淵とが交互にある。体長8cmのカワヨシノボリが多くいた。カワムツの体長12cmのものがいるが、個体数は少なく、体長3cmの幼魚もいた。

調査地点⑰では、水の流れはゆるやかで、水深20~50cmのたまり池のようにになっている。岸边よりの岩の表面に水あかがついており、水質は少し汚れている。アヒルが放し飼いに

されており、水中にアヒルの卵がある場所もあった。ここでは投網、たも網で採集したが、採集した結果を表5に示す。カワムツがこの地点では多く、15個体ほどの群れをなしていた。上流に小さな堰があって、水流の速い場所があり、体長の大きいカマツカもいた。ドンコが岸辺の水草の根本に生息していたのを、たも網で2個体採集した。聞き取りによるとウナギが放流されており、モクズガニは少なくなった。余談であるが、このあたりではイノシシがイネを食べにきたり、ニホンザルも畑にカボチャを取りにくるとの事である。

表5 調査地点⑰での採集結果

魚種	平均体長	採集個体数
カワムツ(B型)	11.2cm	8
ドンコ	8.9	2
シマドジョウ	15.7	1
カワヨシノボリ	7.3	3
オイカワ	12.1	3
カマツカ	28.3	2

調査地点⑱では、中津川の橋付近で調査をした。大きな岩があり、川底は砂礫で、水の流れがゆるやかである。岩の付近の少し深みのある場所には、カワムツやカワヨシノボリがいる。川岸付近にはツルヨシとヨモギが生えており、茎が水につかっている場所でドンコ1個体を採集した。投網で採集した結果を表6に示す。

表6 調査地点⑱での採集結果

魚種	平均体長	採集個体数
カワムツ(B型)	5.4cm	17
ドンコ	3.0	1
カワヨシノボリ	4.5	2

調査地点⑲は、細流であり、わき水が出てきている場所である。ナガレホトケドジョウが生息しており、体長5cmのものを3個体採集した。またカワヨシノボリの体長3.5cmのものを1個体採集した。

調査地点⑳では、黒谷の橋付近を調査した。大きな直径2～3mもある転石がゴロゴロしており、水流は速く、透明度はよい。岩は浸食されてくぼみになっていて、体長12～13cmのオイカワが群れになっているのが観察できた。ゆるやかな場所には、体長14cmのシマドジョウが3個体いた。カワヨシノボリの体長5cmのものが、岩のくぼみや礫の場所に多くいた。オオヨシノボリは体長13cmもあるが、個体数は少なく、3個体確認しただけである。アマゴは、体長5cmのものが水流の速い場所に生息しているが、個体数は少なく、5個体確認しただけである。聞き取り調査によると、この地点にはカマツカもいたが、今は少なくなったという。

2) 聞き取り調査による地方名と料理方法

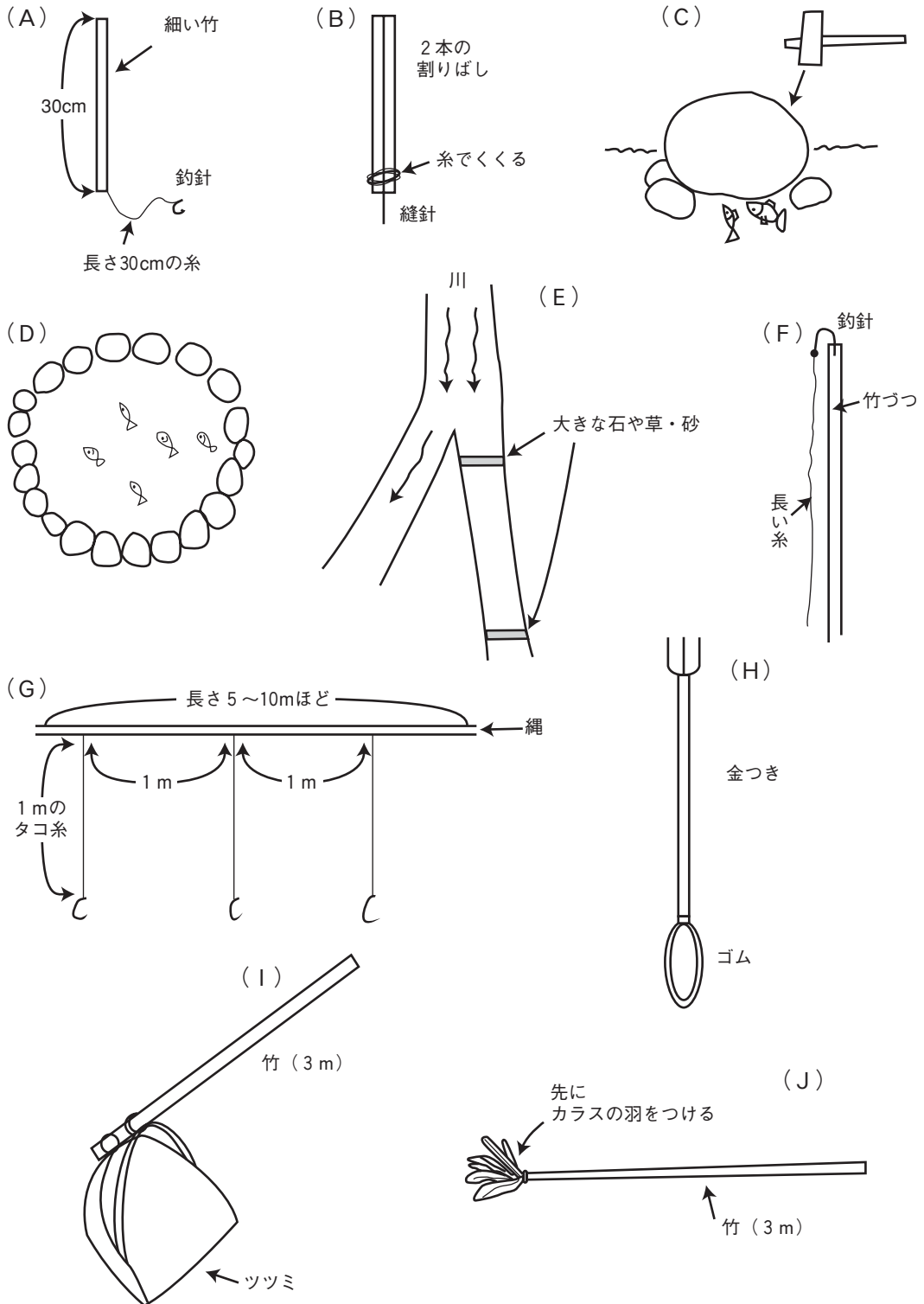
30年以前からの料理方法と地方名を聞き取りにより記録した。カマツカの地方名は、「ヨシ」または「ヨシロウ」であり、焼いて食べた。ヨシノボリの地方名は「ジンヅク」または「ジント」といい、竹ぐしにつらねて刺し、天日で半日ぐらい日干しにし、焼いて食べた。また水で炊いて卵とじにして食べたりもした。オイカワの食べ方も同じようにしていた。オイカワの雌の地方名は「ジャコ」または「ハエ」といい、雄の地方名は「ゴウジ」または「ゴウジバエ」といった。カワムツの地方名は「モトバエ」という。アユは地方名を「アイ」ともいい、スシにしたり、焼いて食べる。アマゴは地方名を「アメゴ」と

いい、焼いて食べたり、姿ズシにする。ウグイは地方名を「イダ」というが、あまり食べない。ニゴイは昔はほとんどいなかった。シマドジョウは唐揚げにしたり、水で炊いて食べたりする。ヌマチチブの地方名を「ジンタ」といい、ヨシノボリ類と同じとしていた。ドンコの地方名は「ドベラコ」で、アカザの地方名を「アカンチャ」という。ナガレホトケドジョウの地方名は「ホトケジンゾク」といった。メダカはいない。

3) 魚を捕獲する方法

今から30年前の子供たちは自然と親しみ、川の魚を捕獲したり、食べたりしていた。門田守雄氏（現在名西高校教諭）の子供のころのそうした体験を聞き取り調査をした。夏にはカーバイドを使用したランプで光をつけて、夜に「金つき」でナマズを突いたり、たも網ですくった。図11—Aのように細い竹の棒に、長さ30cmのタコ糸をくくり、先に釣針をつける。釣針にはミミズかヨシノボリをエサにつけ、大きな石と石の間に釣針を入れていく。この方法でウナギやナマズ、ギギを釣ったが、特にギギが多く釣れ、焼いて食べた。図11—Bの方法は2本の割りバシの間に縫針をつけ、この針でヨシノボリを突く方法である。図11—Cの方法は、大きな岩の上をげんのうか大きな岩でたたくと、その振動で魚が脳振とうを起こすので、魚を捕ることができた。図11—Dに示した方法は、水が引いて浅くなった場所で石を積んで囲みをつくり、その中へヨモギの葉をすりつぶした汁や渋ガキをつぶして入れ、魚がその毒により水面に浮いてくるのを捕る。図11—Eに示した方法は、2本流れている川の一方を大きな石や草を置いて堰止め、「ツツミ」とか網を石の所に置き、逃げる魚を捕獲する。図11—Fに示した方法は、タコ糸を結んだ釣針にミミズをつけ、竹筒の先に引っかけて石の間に入れ、食いついたら竹筒を引き、エサを飲み込んだら糸を引く。このようにしてウナギなどをとった。図11—Gに示した方法は、長さ5～10mの縄を用意し、それに1mのタコ糸の先に釣針をつけてつるす。釣針にエサをつけて川の水面にたらしおき、エサを食べに来た魚をとる。図11—Hに示した方法は、「金つき」の柄の端にゴムをつけ、水中マスクで水中の魚を見ながらゴムの勢いで魚を突く。図11—Iに示した方法は、「ツツミ」を長い竹の先に取り付け、シマドジョウなどを砂ごとすくってとった。これを前がきという。図11—Jは、カラスの羽を竹棒の先につけた、アユやオイカワなどを追い込む道具で、これで一カ所に集めた魚を投網でとった。魚がカラスを嫌う習性を利用した方法である。またチョンガケと言われるアユを取る方法は今も行われている。竹の先に3本の大きな針をつけておき、それに糸をつけて、水中マスクで泳いでいるアユを見ながら、ハリで引っ掛けて、アユを捕る方法である。さらに潮が引くと、多くのアユが群れになっている所を竹ざおでたたいて捕った。こうした30年前の昔の子供たちが川で遊ぶ方法は、次代の子供たちに伝えていきたいものである。

図11 昔の子供達がしていた漁獲の方法 (A~J)



神山町の淡水魚（かっこ内は地方名）

- 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES
真口亜綱 TELEOSTOMI
ニシン目 Clupeida
サケ亜目 Salmonina
サケ科 Salmonidae
アマゴ（サツキマス）*Salmo (Oncorhynchus) masoumacrostomus*（アメゴ）（図12）
アユ科 Plecoglossidae.
アユ *Plecoglossus altivelis*（図13）
コイ目 Cyprinida
コイ亜目 Cypriniformes
コイ科 Cyprinidae
ニゴイ *Hemibarbus barbus*
カマツカ *Pseudogobio esocinus*（ヨシロウ、ヨシ）（図14）
ウグイ *Tribolodon hakonensis*（イダ）（図15）
オイカワ *Zacco platypus*（雌はジャコ、ハエ、雄はゴウジ、ゴウジバエ）（図16）
カワムツ（B型） *Zacco temminckii*（ヤマトバエ、モトバエ）（図17）
コイ *Cyprinus carpio*
ギンブナ *Carassius carassius langsdorfii*（フナ）
スゴモロコ *Squalidus biwae*
ドジョウ科 Cobitidae
シマドジョウ *Cobitis biwae*（ドジョウ）（図18）
スジシマドジョウ *Cobitis tainia striata*（ドジョウ）
ナガレホトケドジョウ *Lefua echigonia*（ホトケジンゾク）（図19）
ナマズ目 Siluriformes
ナマズ科 Siluridae
ナマズ *Parasilurus asotus*（図20）
ギギ科 Bagridae
ギギ *Pelteobagrus nudiceps*（図21）
アカザ *Liobagrus reini*（アカンチャ）（図22）
ウナギ目 Anguillida
ウナギ科 Anguilla
ウナギ *Anguilla japonica*
スズキ目 Perciformes
ハゼ亜目 Percoidei
ハゼ科 Gobiidae
シマヨシノボリ *Rhinogobius* sp. CB（ジンゾク）
オオヨシノボリ *Rhinogobius* sp. LD（ジンゾク）（図23）
カワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus*（ジンゾク）（図24）
スマチチブ *Tridentiger breuispinis*
ドンコ *Odontobutis obscura*（ドベラ）

参考文献

日本動物図鑑（北陸館）



図12 アマゴ



図13 アユ



図14 カマツカ

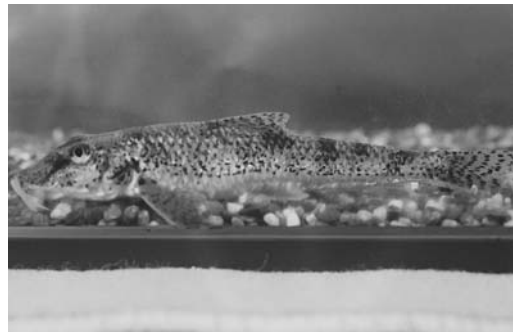


図15 ウグイ



図16 オイカワ上(♀) 下(♂)



図17 カワムツ (B型)

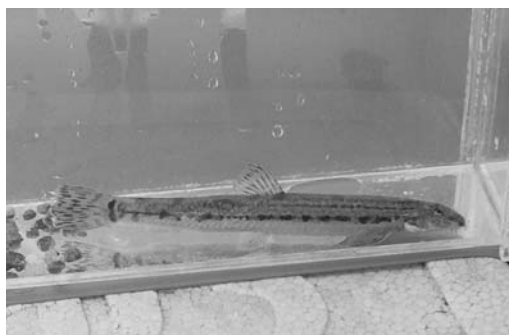


図18 シマドジョウ



図19 ナガレホトケドジョウ



図20 ナマズ



図21 ギギ



図22 アカザ



図23 オオヨシノボリ



図24 カワヨシノボリ